安田裕希選手インタビュー「Zero to One / 無限大の可能性を探して」

Q. 横浜桜ケ丘高校時代にはチームで ４ 番打者を務めていたと聴いていますが、なぜ高校卒業後に大学の野球部でのプレーを選ばなかったのでしょうか？また一度野球を離れたと聴いていますが、再び始めるきっかけは何かあったのでしょうか？

A. 簡単に言うと、もう限界かなと思ったからです。今思うと１８歳で限界なんてあるわけがないのですが、当時はそう思い込んでいました。高校３年になる前の冬くらいには高校で野球を終わりにしようと決めていました。その頃ちょうど技術的な手ごたえがない日々が続いていて…もう無理だなと。今振りかえるとそれを打開するために自分が何もしていなかっただけなのですが・・・。大学に入ってからは遊び程度でしか野球をやっていなかったのですが、たまたま母校に練習の手伝いに行った時に社会人のクラブチームに誘って頂いて、そのチームの試合にお邪魔しました。単純に真剣に野球をやるのが楽しかったのと、そのチームに海外のプロリーグでプレーされていた方が数人いて、その方たちの話がとても刺激的だったことを覚えています。

Q. 野球を再びプレーすることを決めた後になぜアメリカでのプレーを選んだのでしょうか？現在は日本国内にも四国アイランドリーグ Plus や BC リーグを始め素晴らしい独立リーグがあるのにわざわざ海外でのプレーを選んだ理由があれば教えて下さい。

A. もちろん日本の独立リーグに行くという選択肢もありました。しかし、どんな環境でも上手くなるときは上手くなるし、下手な人は下手なままだと

思います。だから、あえて自分に負荷のかかる海外で野球をプレーをしたいなと思いました。その中で自分の能力を高めていければなと。野球以外の面でも英語力だったり得られるものが多くあるとも思いました。もしもそれで自分がつぶれてしまえば諦めもつきますしね。

Q. カリフォルニア・ウィンターリーグがアメリカの Baseball を初めて体感する場所になったと思いますが、その時に感じたことを教えて下さい。またこのスカウトリーグで自身初のプロ契約オファーを受けましたが、経緯を教えて下さい。

A. とにかく自分の価値観が毎日壊れていきました。CWL に参加するまで海外の選手と野球をする機会はなかったので、間近で見る外国人の大きさとパワーにまず圧倒されました。 そして私の契約の経緯ですが、開幕して３試合目に普段のサードのポジションではなく、ショートで試合に出ました。その試合で少し難しいゴロをさばいた時に、後に私の監督となる人がそのプレーを見ていてくれたようです。その試合はヒットも２本打っていましたし、走塁でも少し目立ったプレーがありました。その試合の後には早速オファーがありました。 良いと思ったらすぐに契約オファー。逆を言えばダメだと思ったらすぐにこの話はなくなるだろうな、という思いもあったので最後まで気が抜けませんでした。

Q. ペコスリーグというアメリカのプロ野球独立リーグの 1 つに属するラスクルーセス・ヴァッケロスというチームと契約後にプレーをしたと思いますが、今シーズンは安田選手にとってどのような経験になったのでしょうか？

A. 自分自身で感じることの大切さを学ぶことができたような気がします。私の周りには海外でプレーされた方が何人かいますし、今の時代インターネットを活用すればいろいろな情報を手に入れることができます。しかしそれはあくまで他人がした経験であって、自分のものではありません。他人が感じたことと、自分が感じることは全く違うかもしれない。そういった意味で自分の人間としての視野が広がる良い経験になったとは思います。

Q. アメリカではマイナーリーグのことをハンバーガーリーグなんていうほどに食生活や移動などが大変だと言うけども、実際にこの辺は体験してみてどうだったですか？

A. 食事に関しては本当に苦労しました。ホームゲームでは試合後にピザや

ブリトーなどが出ますが、アウェーではほとんどの球場で何も出ません。他の独立リーグでは渡されるミールマネー（食事代）というのも私たちのリーグは支給されませんでした。長期の遠征の際に、唯一渡されたのが食パンとブルーベリージャムとピーナッツクリーム。チームメイトと「ブレッドリーグ」だなと笑っていました。 移動に関しては、私のリーグは最大でも７～８時間程度なので、他のリーグに比べればそれほどつらくはなかったように思います。ただバンの中に体格のいい野球選手を定員数ギリギリに詰め込んでいたので、ほぼ身動きが取れない状態で移動していくのはつらかったですね。

Q. 今シーズンにおける安田選手の主な 1 日の流れを教えてもらっても良いでしょうか？

A. ホームゲームの時は１９時試合開始で、１６時からバッティング練習。１７時から相手のバッティング練習が始まり、その間は大体の選手がゆっくりしているのですが、私はこの時間を使って個人的に練習をしていました。１８時過ぎくらいからそれぞれがウォーミングアップをしてゲームに入っていきます。

試合が終わるのが大体２２時過ぎ。家に帰ってくるのが２３時から２４時くらいで、その日を振り返っていると寝るのは１時～２時くらいになっていました。そのかわり朝は９時くらいまで寝ます。ゆっくり午前中を過ごして、少し体を動かしてからまた球場に行くという感じです。

Q. 今シーズンの住居環境はどうだったのでしょうか？またその住居環境はホームゲームとアウェーではどう違ったのでしょうか？

A. 住居はどの選手も基本的にはホームステイで、私は現地の日本人とアメリカ人のご夫妻に面倒を見てもらっていました。ご主人の方がアメリカ人で、今は使っていないご主人の職場のようなところをお借りして生活していました。

アウェーの時はホテルというよりも、モーテルという感じでした。どこの地に行っても、何かしら問題点のあるような古いモーテルを利用していましたね。更に球団の経費削減のため、２人部屋に４人の選手で泊まっていました。これは大変でした。

Q. 年間の試合スケジュールはどんな感じでしたか？また、日本のプロ野球や独立リーグよりもアメリカでは解雇が日常茶飯事だと思いますが、１シーズンでどれだけの選手が入れ変わったでしょうか？

A. シーズンの試合が大体７０試合。最大で１７連戦というのがありました。とにかく毎日のように試合していました。 本当に選手はよく入れ替わっていました。２２～２５くらいの選手が常にチームにいましたが、最初から最後までチームにいたのが１５人前後くらいだったと思います。途中から来た選手が試合に出て全く打てず、次の日にはいないということもありましたね。

Q. シーズンを生き残るのが難しいと言われているアメリカのプロ野球独立リーグでのシーズンを生き残りましたが、理由があれば教えて下さい。

A. 私の場合常にレギュラーで出続けられていたわけではないので、なぜ生き残れたのか自分でもわからない部分があります。むしろ解雇されかけたこともあります。ただ、私は内野ならどこでも守りましたし、いつでも試合に出る準備をしていました。結果が全てと聞いていたアメリカではありましたが、そういった面も評価してもらっていたのかもしれません。

Q. 監督は誰でしたか？監督さんはどんな baseball をするタイプですか？また監督とのコミュニケーションはどうしていましたか?

A. ケーシー・ディルというアメリカ人の監督でした。年齢も 29 歳と若く、熱い監督でした。何回試合で退場になったことか…。パワーで押すアメリカ野球の中ではバントや盗塁などを割りと多く使う監督でした。アウェイゲームでは私たちを部屋に招いて一緒にお酒を飲んだり、カードゲームをしたり

、私たちへの気遣いを忘れない監督でした。コミュニケーションは基本的には英語です。私の聞き苦しい英語でも理解してくれようとしていました。

Q. 今シーズン一番印象に残っていることを教えて下さい。衝撃を受けた選手やプレー、また一番嬉しかったことなど思いつくことを教えて下さい。

A. シーズン終了後に MLB のセントルイスカージナルス傘下と契約した選手がいたのですが、その選手は身長も私と変わらないくらいにも関わらず、とてもパワフルなバッティングをしていたことが印象的ですね。一番嬉しかったことは、自分の誕生日にプロ初ヒットが出たことですかね。独立リーグとはいえ、初めてお金をもらって野球をするリーグで、初のヒットが自分の誕生日というのは素直に嬉しかったですね。

Q. 今シーズン一番つらく、大変だと思ったことはありますか？

A. シーズン途中のアウェイの連戦のメンバーから外れたことですね。さすがにメンバーの名前が呼ばれたときに自分の名前がなかったときは解雇されるのかなと思いました。一人残されて練習しているときはつらかったです。ただチームがホームに戻ってきて、監督のところにすぐ話に行くと、その日の試合のメンバー表には自分の名前がありました。とてもほっとしたことを覚えています。

Q. 最後になりますが、今シーズンを終えて自分が一番成長したと感じる点・今後の課題があれば教えて下さい。そして KOREKARA アメリカの Baseball に挑戦しようと思っている選手たちに一言あればお願いします。

A. 3 ヶ月間アメリカで過ごして、技術的にも精神的にも全ての面で行く前よりは多少はタフになっているとは思います。ただ自分が思い描いていた以上の自分の成長は見られませんでした。まだまだ考え方が甘かったかなと思います。強いて言うならば、今の自分の考えのままではダメということが分かったという点では成長できたかなと思っています。全ての点で課題ばかりですが、やはり体の強さの違いを一番に感じました。いきなりアメリカ人のような体にはなれませんが、もっともっと強くしていかないといけないと思います。最後に、野球の技術は正しい考え方と、正しい練習をすれば必ず伸びます。高校時代の半分も練習時間がとれていませんが、それでも日々うまくなっていることを感じます。アメリカ Baseball に挑戦しようとしている人、まず飛び込んでみてはどうでしょうか？今までとは

全く違う視野を手にいれることができると思います。一緒に頑張りましょう！！